



隐喻与思维

汉日英三语中的
概念隐喻研究

韩涛 著

外语教学与研究出版社



隐喻与思维

汉日英三语中的
概念隐喻研究

韩涛 著

外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目 (CIP) 数据

隐喻与思维：汉日英三语中的概念隐喻研究 / 韩涛著. — 北京：外语教学与研究出版社，2017.8

ISBN 978-7-5135-9380-9

I. ①隐… II. ①韩… III. ①隐喻—对比研究—汉语、日语、英语
IV. ①H15②H365③H315

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2017) 第 202585 号

出版人 蔡剑峰
责任编辑 戚新
封面设计 彩奇风
出版发行 外语教学与研究出版社
社址 北京市西三环北路 19 号 (100089)
网址 <http://www.fltrp.com>
印刷 北京京华虎彩印刷有限公司
开本 650×980 1/16
印张 16
版次 2017 年 8 月第 1 版 2017 年 8 月第 1 次印刷
书号 ISBN 978-7-5135-9380-9
定价 55.00 元

购书咨询：(010) 88819926 电子邮箱：club@fltrp.com

外研书店：<https://waiyants.tmall.com>

凡印刷、装订质量问题，请联系我社印制部

联系电话：(010) 61207896 电子邮箱：zhijian@fltrp.com

凡侵权、盗版书籍线索，请联系我社法律事务部

举报电话：(010) 88817519 电子邮箱：banquan@fltrp.com

法律顾问：立方律师事务所 刘旭东律师

中咨律师事务所 殷斌律师

物料号：293800001

本书的出版得到北京外国语大学
世界亚洲研究信息中心资助

本書刊行に寄せて I

知之者不如好之者、好之者不如樂之者

—「隐喻与思维：汉日英三语中的概念隐喻研究」出版にあたって

杏林大学大学院国際協力研究科教授

金田一 秀穂

このほど、韓涛君の博士論文である「隐喻与思维：汉日英三语中的概念隐喻研究」が出版されるにあたり、その緒言を依頼されるといふ榮譽を与えられて、光榮に思います。

韓君は、私の勤務する杏林大学に、河北大学からの交換留学生として来日し、私の研究室に修士論文を提出しました。その成果は大変優れたものでした。しかし、私の研究室ではその高い能力が持ち腐れになることを恐れ、名古屋大学の博士課程を強く勧めて、無事修了しました。

韓君の日本語運用能力が大変優れていることは言うまでもありません。日本語スピーチコンテスト荒らしの異名がありました。また、学友たちからも好かれていましたが、独特のユーモアの感覚があったからだろうと思います。

しかし、なんといっても、韓君の長所は、研究が大好きであることだと思います。優れた研究者は、もちろん知的能力がなければなりません。が、なによりも、その研究に没頭し、努力と言うよりもむしろ、楽しめなければなりません。

ある時学友の一人が学校のそばの道で自転車に乗った韓君とすれ違ったそうです。何やらとても嬉しそうな顔をして自転車を漕いで

いて、声をかけても全く気付かなかったというのです。あとで、韓君に何が楽しかったのか聞いたら、日本語の文法について考えていて、新しくわかったことがあったのだと言っていました。自転車を漕ぎながら、考えることに夢中になってしまうのは、大変危険なことですが、いかにも韓君らしいと思いました。

私の大好きな中国の言葉の一つに、「知之者不如好之者、好之者不如樂之者」というのがありますが、まさに韓君にあてはまります。

これは韓君の出発点です。これからさらに中国語、日本語研究を深めていくことと思います。私は偶然、そのスタートに立ち会えました。とてもうれしく思います。

2016年12月

本書刊行に寄せてⅡ

名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授

丸尾 誠

韓濤氏は東京に位置する杏林大学国際協力研究科の修士課程で学んだ後に、更なる言語研究を志して、名古屋大学大学院国際言語文化研究科（博士課程）に入学した。修士課程において、著名な言語学者、金田一秀穂氏のもとで学んだこともあり、すでに相応の専門知識を有していた。韓氏は入学当初より、将来は高等教育機関において教育・研究職に携わりたいという明確な目標を掲げており、一般言語学、日本語学、英語学、中国語学、対外漢語教学などに精通すべく、日々学業に専念する姿が印象的であった。韓濤氏の強みは中国語を母語としているにもかかわらず、それを研究対象として客観的に捉えて分析する方法論をきちんと身に付けていることであり、将来優れた研究者になるのはこのような人物だと思わせる典型例であったと言っても過言ではない。そして、私のみならず周りの学生も含めて誰もが抱く韓氏に対する共通の印象とは、氏が何よりも「認知言語学」という学問に魅入られていたということである。本書は、その認知言語学をこよなく愛する著者が認知メタファー理論の立場から、現代中国語における概念メタファーの諸相について考察したものである。理論的・実践的な側面から分析を試みると同時に、日本語および英語との比較・対照を通して、日中英三言語に反映された異なる思考様式や行動パターンにも焦点を当てつつ議論

が展開されており、メタファー研究を通して、人間の思考のメカニズムを解明しようとする韓濤氏の強い意志が感じられる。

本書は大きく分けて2つの部分から構成される。第1部（第1～3章）は「理論研究」に相当する。従来、英語（および、それに続く日本語）を中心に行われてきたメタファー研究を概観したうえで、各種理論を中国語に適用した場合の妥当性を検証する意義が記されている。続く第2部（第4～8章）は、認知メタファー理論の立場から、英語・日本語との対照を交えつつ、中国語のメタファーに関する個別の概念が分析された「事例研究」である。この第2部は議論の中核と言うべき部分であり、豊富な具体例を用いて、実証的に検証が行われている。本研究の結論としては、中国語についても「抽象概念の大部分はメタファーに基づいて理解される」という認知科学における主張の妥当性を裏付けるものであったが、これは単に従来の先行研究における見解に追従するだけのものではなく、英語・日本語・中国語という3つの言語の間に見られる概念化の差異についても随所で言及し、明らかにしている。一方で、このことは彼の几帳面な性格が影響していると考えられるが、丁寧に記述しようとするあまり、例えば第4章や第7章で扱われている「容器」の概念に関わる一連の問題などは、日本語の発想と似通っている中国語の表現例についても「詳細な」検証が行われており、そうした場合には、日本語に精通していれば、往々にして結論が予測できるという点で、やや斬新さを欠くものであった。

また、厳密さにこだわるが故に、各章において多くの概念が複数の階層にわたって細分化されており、分類を行うこと自体が本研究の目的となっているような印象を抱く読者も見受けられるものと予

想される。その導き出された区分についても、主に意味を根拠としているため、それらが唯一の枠組みであると言えるのかという疑問は払拭できない。もっとも、こうした疑問は当該研究分野の性格上免れ得ない面があることは否定できず、統語的観点からの分析が主流を占めてきた中国語文法研究において、認知メタファー理論の立場からの分析の有効性を示したという点は評価に値するものであり、その点に本研究の価値を見出すことができる。本書における研究成果を踏まえたうえで、当該分野における研究の更なる進展および広がりが期待できよう。現在、認知意味論および日中対照研究を主な専門分野とする韓涛氏の今後の活躍と学界への貢献を、異国の地より強く願う次第である。

2017年1月

本研究の第3章から第8章は、以下の投稿論文および口頭発表したものに基づき、その後の研究によって明らかにしたことを加味して大幅に加筆・修正を施したものである。

第3章：2009年12月「メタファーのスコープに関する一考察—中国語の“火”の場合—」
『ことばの科学』第22号pp. 61-78 名古屋大学言語文化研究会

第4章：2009年5月「容器のスキーマと中国語“NP+里”の意味拡張」
『日本認知言語学会論文集』第9巻pp. 12-22

2013年3月「中国語の方向補語“起来”“下（来/去）”に関する一考察—認知言語学の観点から—」
『研究報告』第48号pp. 53-59 愛知工業大学基礎教育センター

第5章：2009年10月「中国語《顔》のメタファーについて—〈名誉/不名誉〉という概念との関連において—」
『日本中国語学会第59回全国大会予稿集』 pp. 238-242

2011年3月「中国語における〈恋愛〉のメタファーに関する一考察—認知メタファー理論の立場から—」
『多元文化』第12号pp. 45-57 名古屋大学国際言語文化研究科

第6章：2012年5月「中国語における〈思考〉のメタファー再考」
『日本認知言語学会論文集』第12巻pp. 362-374

第7章：2011年5月「〈コミュニケーション〉のメタファー再考—
中国語のケース—」

『日本認知言語学会論文集』第11巻pp. 49-59

第8章：2014年「〈流動体〉のメタファーに関する日中対照研究
—〈言葉〉を目標領域に—」

『日本認知言語学会論文集』第14巻（掲載予定）

本論文における表記法

- (1) 例文について、引用例がインターネット上に公開されているホームページからの引用である場合には、例文の後に引用先のURLを示し、小説などの場合には、例文後の（ ）内に作者および作品名を示した。また、筆者による作例の場合には、「作例」と明記した。
- (2) 例文には、各章ごとの通し番号を、（ ）で括って付してある。
- (3) 例文や考察対象語句の文頭に付された「*」は、その表現が容認不可能であることを示し、「?」は、容認不可能ではないものの若干不自然であることを示し、「??」は「?」よりもさらに不自然であることを示す。
- (4) 例文中、直接考察対象となっている箇所は実線で示し、それ以外の問題となる箇所は破線や波線で示す。
- (5) 図表番号は、各章ごとの通し番号を付してある。
- (6) 注は、各章ごとに通し番号を付し、各ページ末に挙げる。
- (7) 語や句の意味或いは指示対象は〈 〉で括って示す。

目次

序章	1
0.1 研究対象と研究目的	1
0.2 本論文の構成	5
第1章 認知メタファー理論の基本的な考え方	10
1.1 はじめに	10
1.2 概念メタファーとは	11
1.2.1 起点領域と目標領域	11
1.2.2 存在的対応関係と認識的対応関係	13
1.2.3 概念メタファーとメタファー表現	16
1.3 概念メタファーの性質	20
1.3.1 部分的写像	20
1.3.2 不変性原理	23
1.3.3 一方向性原理	25
1.4 メタファーのネットワークと継承	28
1.5 本章のまとめ	30

第2章	概念メタファーの基盤	31
2.1	はじめに	31
2.2	Lakoff and Johnson (1980)	32
2.3	Grady (1997、1999)	36
2.4	鍋島 (2002、2007、2011)	37
2.4.1	構造的基盤	38
2.4.2	評価性基盤	38
2.4.3	カテゴリー性基盤	39
2.5	分析	40
2.6	本章のまとめ	50
第3章	概念メタファーのスコープ	51
3.1	はじめに	51
3.2	中国語の〈火〉のメタファーのスコープ	53
3.2.1	英語の〈火〉の場合	53
3.2.2	《感情は火》	55
3.2.3	《状況は火》	61
3.2.4	英語との比較	65
3.3	中国語の〈火〉のメタファーの主な意味焦点	66
3.3.1	メタファーの主な意味焦点とは	67
3.3.2	〈火〉のメタファーの主な意味焦点	68
3.4	中国語の〈火〉のメタファーの中心的写像	70
3.5	本章のまとめ	72

第4章 空間のメタファー 73

- 4.1 はじめに 73
- 4.2 〈上下〉のメタファーをめぐって 74
 - 4.2.1 先行研究とその問題点 74
 - 4.2.2 メタファーと“起来”“下(来/去)”の用法
..... 77
- 4.3 〈容器〉のメタファーをめぐって 88
 - 4.3.1 〈容器〉のイメージ・スキーマ 89
 - 4.3.2 〈容器〉のイメージ・スキーマの推論 92
 - 4.3.3 《身体部位は様々な抽象物を入れる容器》
..... 94
- 4.4 本章のまとめ 112

第5章 感情のメタファー 114

- 5.1 はじめに 114
- 5.2 中国語における〈名誉・不名誉〉の概念化 114
 - 5.2.1 〈名誉・不名誉〉のメタファー体系 115
 - 5.2.2 起点領域は概念固有的か 124
- 5.3 中国語における〈恋愛〉の概念化 126
 - 5.3.1 《恋愛は熱》 127
 - 5.3.2 《恋愛は火》 129
 - 5.3.3 《恋愛は電磁気》 131
 - 5.3.4 《恋愛は移動物》 132
 - 5.3.5 《恋愛は脆いもの》 135

5.3.6	《恋愛は食べもの》	136
5.3.7	《恋愛は植物》	138
5.3.8	《恋愛は旅》	140
5.3.9	《恋愛は戦争》	142
5.4	本章のまとめ	146
第6章	思考のメタファー	148
6.1	はじめに	148
6.2	先行研究とその問題点	149
6.3	中国語における《考えは物理的なもの》のメタファー	152
6.3.1	《考えの性質は物理的なものの性質》	152
6.3.2	《考えは力》	153
6.3.3	《考えは植物》	154
6.3.4	《考えは食べもの》	155
6.3.5	《考えは液体》	156
6.3.6	《考えは火》	158
6.4	中国語における《考えることは身体行為》のメタファー	159
6.4.1	《考えることは動くこと》	160
6.4.2	《考えることは知覚すること》	163
6.4.3	《考えることは対象物を操作すること》	165
6.4.4	《アイデアを獲得することは食べること》	166

6.5	中国語における〈思考〉メタファーの基盤	168
6.5.1	共起性基盤	168
6.5.2	構造的基盤	169
6.5.3	評価性基盤	169
6.6	本章のまとめ	170
第7章	コミュニケーションのメタファー—日中英対照の観点から—	172
7.1	はじめに	172
7.2	先行研究	175
7.3	中国語における〈コミュニケーション〉のメタファー	177
7.3.1	目標領域の焦点化とは	178
7.3.2	〈話し手〉—〈言葉〉	179
7.3.3	〈聞き手〉—〈言葉〉	182
7.3.4	〈言葉〉	184
7.4	中国語における〈コミュニケーション〉の通俗的理解	185
7.4.1	〈容器〉のメタファーとの関連性	185
7.4.2	〈コミュニケーション〉の通俗的理解に関する分析	188
7.5	野村(2002)の仮説の検討	190
7.6	本章のまとめ	192